

【旧約聖書日課】エレミヤ書 28章1～17節

¹その同じ年、ユダの王ゼデキヤの治世の初め、第四年の五月に、主の神殿において、ギブオン出身の預言者、アズルの子ハナンヤが、祭司とすべての民の前でわたしに言った。

²「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしはバビロンの王の轡を打ち砕く。³二年のうちに、わたしはバビロンの王ネブカドネツァルがこの場所から奪って行った主の神殿の祭具をすべてこの場所に持ち帰らせる。⁴また、バビロンへ連行されたユダの王、ヨヤキムの子エゴンヤおよびバビロンへ行ったユダの捕囚の民をすべて、わたしはこの場所へ連れ帰る、と主は言われる。なぜなら、わたしがバビロンの王の轡を打ち砕くからである。」

⁵そこで、預言者エレミヤは主の神殿に立っていた祭司たちとすべての民の前で、預言者ハナンヤに言った。⁶預言者エレミヤは言った。

「アーメン、どうか主がそのとおりにしてくださいるように。どうか主があなたの預言の言葉を実現し、主の神殿の祭具と捕囚の民すべてをバビロンからこの場所に戻してくださいるように。⁷だが、わたしがあなたと民すべての耳に告げるこの言葉をよく聞け。⁸あなたやわたしに先立つ昔の預言者たちは、多くの国、強大な王国に対して、戦争や災害や疫病を預言した。⁹平和を預言する者は、その言葉が成就するとき初めて、まことに主が遣わされた預言者であることが分かる。」

¹⁰すると預言者ハナンヤは、預言者エレミヤの首から轡をはずして打ち砕いた。

¹¹そして、ハナンヤは民すべての前で言った。

「主はこう言われる。わたしはこのように、二年のうちに、あらゆる国々の首にはめられているバビロンの王ネブカドネツァルの轡を打ち砕く。」

そこで、預言者エレミヤは立ち去った。

¹²預言者ハナンヤが、預言者エレミヤの首から轡をはずして打ち砕いた後に、主の言葉がエレミヤに臨んだ。

¹³「行って、ハナンヤに言え。主はこう言われる。お前は木の轡を打ち砕いたが、その代わりに、鉄の轡を作った。¹⁴イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしは、これらの国すべての首に鉄の轡をはめて、バビロンの王ネブカドネツァルに仕えさせる。彼らはその奴隷となる。わたしは野の獣まで彼に与えた。」

¹⁵更に、預言者エレミヤは、預言者ハナンヤに言った。

「ハナンヤよ、よく聞け。主はお前を遣わされていない。お前はこの民を安心させようとしているが、それは偽りだ。¹⁶それゆえ、主はこう言われる。『わたしはお前を地の面から追い払う』と。お前は今年のうちに死ぬ。主に逆らって語ったからだ。」

¹⁷預言者ハナンヤは、その年の七月に死んだ。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 8章31～47節

³¹イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。³²あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」³³すると、彼らは言った。「わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません。『あなたたちは自由になる』とどうして言われるのですか。」³⁴イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。³⁵奴隷は

家いつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる。³⁶だから、もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる。

³⁷あなたたちがアブラハムの子孫だということは、分かっている。だが、あなたたちはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉を受け入れないからである。

³⁸わたしは父のもとで見たことを話している。ところが、あなたたちは父から聞いたことを行っている。」

³⁹彼らが答えて、「わたしたちの父はアブラハムです」と言うと、イエスは言われた。「アブラハムの子なら、アブラハムと同じ業をするはずだ。⁴⁰ところが、今、あなたたちは、神から聞いた真理をあなたたちに語っているこのわたしを、殺そうとしている。アブラハムはそんなことはしなかった。⁴¹あなたたちは、自分の父と同じ業をしている。」そこで彼らが、「わたしたちは姦淫によって生まれたものではありません。わたしたちにはただひとりの父がいます。それは神です」と言うと、⁴²イエスは言われた。「神があなたたちの父であれば、あなたたちはわたしを愛するはずである。なぜなら、わたしは神のもとから来て、ここにいるからだ。わたしは自分勝手に来たのではなく、神がわたしをお遣わしになったのである。⁴³わたしの言っていることが、なぜ分らないのか。それは、わたしの言葉を聞くことができないからだ。⁴⁴あなたたちは、悪魔である父から出た者であって、その父の欲望を満たしたいと思っている。悪魔は最初から人殺しであって、真理をよりどころとしていない。彼の内には真理がないからだ。悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、その父だからである。⁴⁵しかし、わたしが真理を語るから、あなたたちはわたしを信じない。⁴⁶あなたたちのうち、いったいだれが、わたしに罪があると責めることができるのか。わたしは真理を語っているのに、なぜわたしを信じないのか。⁴⁷神に属する者は神の言葉を聞く。あなたたちが聞かないのは神に属していないからである。」

戦争や災害や疫病【こども説教のために】

今日は9月1日。1923年のこの日、関東大震災が発生し、10万人以上の方が亡くなりました。わたしの前任地は、東海道の古い宿場町に建てられ他教会で、そのときは、牧師が置かれるようになって5年目、前年にやっと教会堂を献堂したばかりでした。ところが、大きな揺れで会堂建物は倒壊し、牧師は下敷きになってしまったのです。牧師は建物の中から助け出されましたが、その年の暮れに亡くなりました。希望に燃えて歩み始めたばかりだった教会の人たちは、どれほど落胆したことでしょう。自分たちも被災して大変だったに違いありませんが、彼らは新たな望みを抱いて、開業して間もない鉄道駅近くに土地を求め、新たに教会堂を建てて歩み始めたのです。

わたしたちは、戦争や災害や疫病のニュースを、絶え間なく聞かされています。自分たちがその渦中に巻き込まれることもあります。それでも、わたしたちは、いつも希望の光を見ることができのでしょうか。

関東大震災の折、一人の宣教師が、キリスト教学校に避難してきた人々の灯すロウソクの光を見て、一編の讚美歌を作りました。「遠き国や」という讚美歌です。その光が、十字架に見えたのだそうです。英題では、「光は十字架の上にある」です。教会の先輩たちは、主イエスを「世の光」と信じ、その十字架の上に希望の光があることを、身をもって示してきたのです。

平和を預言する者

わたしの幼少時代、9月1日は、祖母の話を書く日でした。明治生まれ、静岡市出身の祖母は、14歳で関東大震災を経験したのです。静岡市は大きな被害はなかったようですが、大きな揺れは驚きだったようで、毎年決まって同じ話を聞かせてくれるのが常でした。祖母は、それから数年後に青山の高等女学部に進学し、学院教会で洗礼を受けキリスト信者になったのです。あの「遠き国や」の讃美歌を作った宣教師ジェイムズ・V・マーティンは、青山学院に在籍していたということですから、祖母もあのできたばかりの新しい讃美歌を教えられ、歌っていたのかもしれませんが。

以前は、この季節になると決まって、関東大震災のことが話題とされ、防災の見直しが語られていました。けれども、まもなく30年になる阪神淡路大震災以降、わたしたちにとって地震をはじめとする災害は、「忘れたころにやってくる」ものではなく、「忘れる間もなく次が襲ってくる」ものになってしまいました。そして、近年は、疫病（感染症）に戦争です。それは、もしかするとこれまでも絶え間なく世界の此処彼処で起こっていたのかもしれませんが、この20年ほどで驚くほど可視化されてきたのです。情報が溢れ、だれもがその情報に触れることができるようになりました。そして、その情報の大海の中に呑み込まれてしまっているのです。

預言者エレミヤは言います、「**あなたやわたしに先立つ昔の預言者たちは、多くの国、強大な王国に対して、戦争や災害や疫病を預言した**」と。彼がそう言うのは、対峙する預言者ハナンヤが「**平和を預言する者**」だからです。戦争の最中、敵軍に攻められ、災害や疫病が蔓延する中であって、人々を安心させる「**平和の預言**」を、預言者ハナンヤは告げていました。エレミヤもまた、そのような「**平和の預言**」を告げることを人々に求められていたのです。けれども、エレミヤは、続けて言うのです、「**平和を預言する者は、その言葉が成就するとき初めて、まことに主が違わされた預言者であることがわかる**」と。そして、彼自身は、なお続く「**戦争や災害や疫病**」を預言して語り続けたのです。

101年前、関東大震災が発生する20年ほど前から、地震学者の間では激しい論争が繰り広げられていました。一人の地震学者が関東地方でまもなく大地震が発生すると警告を発していたのですが、彼の上司をはじめとする学会は、それを世情を動揺させる浮説として激しく攻撃したのです。ところが、ほどなくして関東大震災が発生したのです。

エレミヤは、「平和」を語らなかつたわけではありません。けれども、「戦争や災害や疫病」から目を逸らすことをしませんでした。そこで起こっていることを語らずに、真の「平和」に至る希望を語ることはなかつたのです。

言葉にとどまる、ということ

国会図書館本館の入口には、「真理が我らを自由にする」という言葉が日本語とギリシア語で刻まれています。今日、主イエスがお語りになっている、「**真理はあなたたちを自由にする**」という言葉が元になっています。もちろん、国会図書館に掲げられている言葉は、「学問における真理」を指して言われているものですから、意味合いが随分違います。主イエスは、ご自分の言葉にとどまる者が真理を知るようになり、それによって自由にされる、とおっしゃられているのです。それは、「信仰における真理」です。「学問における真理」とは、やはり意味合いが異なるでしょう。そうだとしても、共通することもあるのです。「真理」とは「自由」をもたらすものだ、ということです。「真理」は、わたしたちを「縛る」ものではないのです。

主イエスが「**わたしの言葉にとどまるならば**」とおっしゃるとき、わたしは、とても不思議な感覚を抱きます。それは、主イエスの残された御言葉そのものが、どこか掴み切れないもののように感じられることがあるからです。明瞭に正解が示されるというよりは、問いかけられて、聞いた者が自分でその問いに答えなくては完結しないような言葉を、主イエスは、いつも語られるのです。別言すれば、「主イエスの言葉にとどまる」というのは、わたしには、「主イエスと対話し続ける」ことのようにしか受け取れないのです。

皆さんの中には、主イエスの言葉を、偉人の人生訓として格言のように蓄えることを求められている方もあるでしょう。そのような意図で編纂された著作も、少なくありません。それはそれでよいのです。釈迦の言葉や孔子の言葉と並んで、イエスの言葉が人類の英知として受け継がれているというのならば、わたしたちは主イエスに従う者の教会に連なる一人として、少しは誇ってもよいと思います。堂々と、世の人々に主イエスの言葉を伝えたらよいと思います。けれども、その言葉が、わたしたちを「自由」にするのではなく、「縛る」ものになるとしたら、それはどこかで間違った聴き方をしているのでしょう。

主イエスを信じた者たちは言います、「**わたしたちにはただ一人の父がいます。それは神です**」。その「**父から聞いたことを行っている**」のか、と主イエスは問われるのです。

主イエスは、わたしたちが「父」とお呼びする神の御言葉のうちに生きられたのです。御言葉の交わりのうちにとどまり、自由を得させる真理を知る者となられたのです。わたしたちにも、そうなることを願ってくださっているのです。本当の弟子となって、御父と御子との言葉の交わりのうちに**わたしたちも**とどまるのです。そこに、災いからも偽りからも自由に解き放ち、真理を知るようにさせる道があると、主イエスはお示しなのです。